藤子不二雄Ⓐ

1万字インタビュー

Fujiko Fujio Ⓐ
10,000 letters
interview

聞き手：今秀生
撮影・デザイン：竹内吾郎（MSS）
構成：日下宏介（MSS）

寺田ヒロオの漫画をリアルタイムで読んでいない人にとって、寺さんといえば「まんが道」のテラさんだ。

「まんが道」のテラさんは優しく大きな瞳で、トキワ荘に住む後輩たちを包み込む。時には厳しく、時には温かく後輩を見守る姿に、大人の理想像を見た読者も多いだろう。

そのテラさんはあくまでも藤子不二雄Ⓐの目線で描かれたものだ。我々は藤子不二雄Ⓐからみたテラさんを知っているだけで、藤子不二雄Ⓐが愛したトキワ荘やテラさんや仲間たちを追体験しているにすぎない。

では、実際の寺田ヒロオとテラさんには隔たりがあるのだろうか。

トキワ荘メンバーの中でも最も寺田ヒロオと親交が深く、寺田ヒロオからも厚く信頼されていた藤子不二雄Ⓐに話をうかがった。

◆僕らは寺子屋の生徒

――安孫子先生は「まんが道」「愛・・・しりそめし頃に・・・」でトキワ荘を世間に浸透させた張本人ですが、それらは「トキワ荘青春日記／いつも隣に仲間がいた・・・」で公開されたご自身の日記を元に描かれているんですよね？

藤子　そうです。記憶はすぐになくなるんだけど、あの頃は割と暇で日記を克明につけていたんですね。昭和29年に上京したんだけど、手塚先生の出現で児童漫画がブームになって、新人の僕らに依頼がドンドン来たんです。新人で断るわけにもいかないし、嬉しいのもあってジャンジャン引き受けてたら、いわゆるオーバーワークでほとんど連載を落としちゃってね。それが致命的でそこから1年間完全に干されたんです。だから本当に毎日暇で(笑)。

――じゃあ、干されたおかげで「まんが道」が生まれたワケですね(笑)。忙しいばかりじゃ物語になりませんもんね。

藤子　よく遊んでましたよ。寺さんは新潟の新発田の電電公社で社会人野球のエースでね、もうちょっとでプロ野球のスカウトが来たくらいの野球少年が、なぜか漫画が好きで漫画家を目指して東京に来たんです。僕も野球をやってたんでキャッ

チャーをやって、寺さんと「エラーズ」っていうチームを作って試合ばっかりしてました。哲学堂っていうグランドで一日ダブルヘッダーを週に3回やったりして。いろんなチームとやったけど、誰も寺さんの球にかすりもしない。1点取れば勝つんだよね。石森氏とか赤塚氏は野球なんか出来ないのに赤塚氏はセカンド、石森氏はライトなんだけど、ただ立ってるだけでね(笑)。

――哲学堂ではテニスをやったりもしていたそうですね。

藤子　テニスやりましたよ。今で言うグループ交際みたいなことをしてましてね。「こぐまのころすけ」を描いたはがまさお先生のお嬢さんが僕らと同い年くらいで、そのお嬢さんと同級生のグループと、僕と寺さんと永田竹丸氏と森安なおや氏でグループ交際してたんです(笑)。テニスをやったりお茶を飲んだり、楽しかったですよ。あと、コーラスっていうか歌声運動が当時流行っていて、僕とか寺さんとかそういうの苦手なんだけど、女の子とつきあえるのでムリして行きました(笑)。優雅な時代ですね(笑)。まあ当時お金もないし、そんなにバーンと派手に遊んでたわけじゃないけど。

――あとは寺さんの部屋で飲んだり？

藤子　そうそう、毎日のように寺さんの部屋へ集まって。寺さんが考案したチューダー、サイダーがほとんどでそこに焼酎をたらした物を飲みながら映画の話とか女性の話とかばっかりしてましたね。漫画の話はほとんどしませんでしたよ(笑)。

――「まんが道」にはあまりその辺の事は詳しく描いてないですね(笑)

藤子　そうですね(笑)。「愛…しりそめし頃に…」の方では若干描いてますけど。

――「愛…しりそめし頃に…」のそのあたりの話だと森安なおやさんがけっこう積極的に活動してますね(笑)

藤子　彼はなかなか面白い男でね、遊びのうまい男なんですよ。漫画は天才的なのを描くんだけど、どこかちゃらんぽらんで締め切りを守らないわけ。だから途中で挫折したんだけど。グループのなかのまとめ役でみんなに電話したりアプローチしたりしてね、いい男でした。永田氏は非常にまじめで、きちっとしてましたね。